芸豪烈伝その28

浪曲がいろどる姉妹の人生模様

京乃天姫（きょうの・あまひめ）　泉和子（いずみ・かずこ）

文・おさだ衛

写真左は、きょうの・あまひめ　本名・木下天姫　1933（昭和8）年、長崎県諫早うまれ。昭和24年、桃中軒如雲に入門、半年後に熊本市で桃中軒雲の栄という芸名で『岡野金右衛門』を読む。おおらかで豪快な芸には定評がある。趣味は洋画の西部劇鑑賞。写真右は天姫の姉の、いずみ・かずこ　本名・泉御代仁（みよに）。1930（昭和5）年、長崎県諫早うまれ。14歳で日吉川秋斎に弟子入り、芸名は日吉川和千代。昭和48年、泉和子に改名。趣味はマージャン。

親子、夫婦、兄弟が浪曲師または曲師という例はたくさんあるが、兄姉4人がすべて浪曲師とは珍しい。姉妹で駆け抜けてきた浪曲人生だ。

現在は京乃天姫が太夫で泉和子は曲師として二人三脚で活躍している。本格的な芸だが本拠地が関西なので、東京に来る機会が少ないのは残念だ。

京乃天姫が桃中軒雲の栄の頃。18歳、奈良県の大和高田市にてテーブル掛け披露。彼女の周りを冨士月子、吉田三笠や芸能界の有力者たちの花輪が二重三重に囲んでいる。

3歳年下の妹・京乃天姫は「浪曲で救われました」と語り、「私は、そんなに浪曲は好きじゃなかったんですよ。親を恨んでますよ」というのは姉の泉和子。

石材店を営んでいた父親が大の浪曲ファンで子供たちを全員、浪曲師にしている。

長男が梅中軒鶯童に入門して梅中軒鶯（現在は引退）、長姉が日吉川秋斎の弟子で梅山和子（現在は引退）という浪曲一家だ。

泉和子は、

「私は恥ずかしがり屋で、ひとの前で浪曲を演るのはいやだったんですけどね、堅気の性分ですから。声は昔から良かったんですけどね。ははは」

父権が強い戦前の時代だったのだ。

泉和子は昭和30年ころから40年にかけて妹の「京乃天姫一座」に加わり天姫のマネージャーとして活躍し、今も天姫のマネージャーと曲師を兼ねている。

「私は昔のやりかたしか知らない旧式な人間ですが、そういう伝統的なことを後進に伝えたいと思います」

温故知新。新奇なものだけがもてはやされる今、伝統と格式を伝える人は貴重な存在だ。

さて京乃天姫は、栴檀は双葉より芳し、幼少の頃から浪曲が好きで小学生

時代から天光軒満月の『父帰る』や『涙の乳房』などをレコードで覚え、大人の前で堂々と演じていた。

「私が育った長崎県の諫早は田舎でしてね。浪曲師になった姉たちが着飾って里帰りするのをみて、とてもうらやましくて、一日でも早く浪曲師になりたかったんです」

天姫（それにしても優美な響きを持つ本名だ）は桃中軒雲右衛門門下で天才少年浪曲で鳴らした桃中軒如雲（じょうん）の弟子となり博多で浪曲修行をすることになる。16歳のことだった。

昭和31年。大阪の浪曲が盛んだった頃。前列左から京山幸枝栄、泉和子、京乃天姫、京山小圓嬢。女流団も全盛だった。

「私は前読み（前座）をしていないんですよ。教えてくれる師匠が看板だと弟子も相応に待遇されるんですよ。

如雲師匠は大きな芸でしたよ。いわゆるトリ読みです。会のおしまいをキッチリ締める正規の芸でした」

弟子にとって師匠の教えは絶大だ。

「師匠には芸だけでなく、人間は筋道を通して生きていくものだと教えられました。女としてのたしなみ、茶道や華道も習わせていただきました。感謝しています」

昭和27年に大阪に出て、京山華千代のもとで勉強、「京乃天姫一座」を作り全国を巡業した。

昭和47年ころに一時、浪曲界を離れるが、

「亭主に放（ほ）かされましてね。失意のどん底にあったんですが、私には大好きな浪曲があったんだと改めてわかりまして、昭和57年にカンバックしたんですよ」

25歳のころの泉和子。「私は本当は学校の先生になりたかったんですよ」。いまの師は子供3人孫3人に囲まれ悠々自適の生活だ。

自身の性格は「相手が間違っていたら、誰にでも向かっていくんですよ。それと嫌なことはすぐに忘れる得な性分ですね」

大阪の浪曲界の今後は。

「若い人ががんばっています。福ちゃん（京山福太郎）は後援者が多く、（松浦）四郎若さんは人柄もいい。ほかの若い有望なひとがたくさんいます。また人気を盛り返すと信じたいですね」

天姫のその言葉にすぐ泉和子が、

「このひとも浪曲をやるだけが生き甲斐で、ほんまの太夫かたぎなんです」と呼応する。

まるで二人の舞台のような息の合い方だった。

浪曲親友協会が主催する、毎年恒例の浪曲劇。中央が水戸黄門の廣澤駒藏。後列左から京山宗若、京山幸若、松浦四郎若。芝居ごころがある京乃天姫は、この手の芝居には欠かせない。

浪曲…これほどすばらしい芸は他にはないと思います。

浪曲家の皆さん…頑張って下さい。

多くのファンを楽しませて下さい。

31/52

葛飾区・坂本豊吉